

いまこそチャンス！

奄美に国際大学をつくろう

島の悲願実現へ本気で取り組もう！

前関東安陵会会長 池田秀秋

まさに我が意を得たりの思いだった。9月5日～9日付けの南海日日新聞に掲載された4回にわたる連載記事「奄美に国際大学を」に何度膝を打ったことだろう。寄稿したのは奄美出身で立命館アジア太平洋大学（APU）名誉教授の高元昭紘先生。APUの設立準備の段階から深くかかわってきた専門家だけに、その具体性のある提言は説得力に富み、かつ熱意にあふれるものであった。高元先生の力強い呼びかけに励まされながら、心から賛同の意見を述べさせていただきたいと思う。

このままでは島はどうなる？

まずは島の置かれた状況を考えざるを得ない。いまも昔と同じように、島では誰もが明るく、陽気に暮らしている。が、一皮めくると、その現状に憂いを感じない者はいないのではないだろうか。このままいったら、島は衰退の一途、遠くない時期に滅びてしまうのではないか……多くの人がそう感じているのではないだろうか。

その最大の理由は言うまでもなく、若者の流出だ。少子高齢化の荒波は島において特に厳しく、さらにその上に島育ちの若者たちが当然のように島外へと去っていく。こうして人口が減少し続ける島では経済の萎縮は避けがたく、雇用は減退するばかり。その結果、若者の流出は加速し、島全体の活力はますます失われる。まさに負のスパイラルが常態化してしまっているとしか言いようがない。このままでは島は滅亡…人々が抱く危機感は決して大げさなヨタ話ではないのだ。

そんな憂いを抱えて仲間たちと酒を酌み交わしながら、何度となく交わした言葉がある。「奄美に大学があつたらなあ」。自分の口からも、仲間たちの口からも、何度も何度も出た言葉だ。夢物語のようでいて、皆どこか本気なのだ。夢と現実の壁に挟まれて、それでもなお前を向こうとしている島の人々の、偽らざる本音が込められているような気がしてならない。

若い人材の育成が島を救う

いま、事態は急展開している。夢物語が、本気で実現できる手の届くテーマへと変わってきているのだ。決して独断と偏見の希望的観測ではない。「奄美に大学を」を後押しする客観的な状況が確実に生まれてきているのだ。しかも「国際大学」だ。

まず何とんでも高元先生も指摘するように、2018年に奄美・琉球の一部が世界自然遺産に登録される可能性が高まっていることだ。さらに2020年には東京オリンピックも開催される。こうした大きな流れの中、奄美への観光需要が急激に高まることが期待され、現実には海外からの大型のクルーズ船の寄港も相次いでいる。世界に誇るべき奄美の自然と文

化をグローバルに発信する時が、いままさに来ているのだ。

こうした時代の潮流を受け止め、島の発展の大きなうねりにしていくには何が必要なのか。言うまでもない、人材である。斬新な発想、高度な専門知識、最先端の技術、しなやかな行動力…こうした新時代を切り開くための創造性を備えた若者たち。奄美の再生を中心となって担う若きリーダーたちが今ほど求められている時はない。そんな人材を育てる中核となる場、それが我ら悲願の大学なのだ。

革新的で地域密着の大学を

では、具体的にはどんな大学をめざすべきなのか。規模は小さくても、革新的できらりと光るコンセプト、アカデミックでありながら実践的なノウハウを身につけられるカリキュラムなどが必要になる。

具体例を上げれば、奄美の自然・文化遺産の研究、観光事業を飛躍させるスペシャリストの養成、ICT（情報通信技術）を活用したスマート農業（省力化や品質向上を可能にする次世代農業）の研究、養殖など最新の水産技術の習得など、既存の大学とは一味違った方向性は容易に見いだせるだろう。

次に大事なことは、地元密着の大学にすることだ。キャンパスは常にオープンにし、特殊な技能を持った島の先達たちを招いた特別授業、行政や地元住民とのコミュニケーションができる場の提供、海外からの留学生の積極的な受け入れ、国内外の大学との意欲的な交流など、大学という殻を打ち破るチャレンジを様々な形で追求していく。こうして島全体の空気が活性化されれば、さまざまな研究機関や企業を呼び込むチャンスも大幅に増えるだろう。

壁は財政、皆で知恵を出し合おう

しかし、大学新設には、さまざまな壁が立ちはだかっている。中でも最大の壁は「財政」だろう。高元先生案の「公立大学」を前提とするなら、すべては鹿児島県と奄美側の英断にかかっていると断言できる。奄美での大学新設は、県にも大きなメリットをもたらすことは明らかである。県には何としても俯瞰力（グローバルな視点）を持ち、県の将来を見据えた先見性を発揮してもらいたい。奄美側には大学新設に向けて広く世論を喚起するのはもちろん、行政サイドの腰の据わったリーダーシップを心から期待したい。

奄美がこのまま衰退の道をたどるのか、それとも東南アジア圏の中枢を担う確固とした地歩を築けるのか、我々はいま、その岐路のど真ん中に立っている。どちらに舵を切るのか、その鍵をにぎっているのが悲願の大学新設であると信じる。すべての人々、関係する組織、団体が知恵と力を出し合い、支援の輪を広げてほしいと切に願っている。